
病と死の傍の賢治

金森修

東京大学教授

「雲はたよらないカルボン酸」

(宮沢賢治「風景」)

声にならない慟哭

考えてみるなら、その短い生涯の中で宮沢賢治が健康だった時期はそう長くはない。若い頃も鼻炎や肋膜炎などの病歴が残されているが、やはり有名なのは三十歳で花巻農学校を依願退職し、自炊生活の傍ら農民指導を始めるようになってからのことだろう。羅須地人協会を設立し、その後、肥料設計や稲作指導に東奔西走、その疲れで結核性の肺炎を起こしたのが昭和三年八月、彼が三十二歳のときである。その後、昭和八年九月にわずか三十七歳で逝去するまで、完全に健康な日はほとんどないという状態だった。病と死は、賢治の傍らに



金森修氏

あった。

その昭和三年八月から続く二年間ほどの時期に書きためられた詩篇は『疾中』と総称されるものであり、¹ 学文化史の立川昭二に「日本詩歌史で病いを歌った最高の作品群」と形容されるほどのものだ。『疾中』所収の一篇、「眼にて云ふ」の冒頭には「だめでせう／とまりませんな／がぶがぶ湧いてゐるのですからな／ゆふべからねむらず血も出つづけなもんですから」というような切迫した表現がある。素人目には一瞬、結核の咯血かとも思える描写だが、それにしても「がぶがぶ湧いてゐる」という言葉が違和感を与える。案の定、立川によれば、壊血病からくる歯齦出血だろうという。⁴ 栄養失調で歯茎を潰瘍でやられ、がぶがぶ湧いてくる血液。ただでさえ弱った体からへ生命の素がどんどん逃げていくのを見ながらも、詩人はそれに敷衍空けて「血がでてゐるにかゝはらず／こんなのにのんきで苦しめないのは／魂魄なかばからだをはなれたのですかな」と歌う。

そして最後に「あなたの方からみたらずぬぶんさんたんたるけしきでせうが／わたくしから見えるのは／やつぱりきれいな青ぞらと／すきとほつた風ばかりです。」と続けて、詩を終えるのだ。

いまの時点でこれを読み返してみると、一種の既視感のようなものに襲われるのは私だけではないはずだ。客観的には衰弱著しい病者の、迫真に満ちた自らの身体の描出。それと同時に、それをあたかも大したことでないともいうかのように、その状況全体から一瞬身を引いてみせるという姿勢。青ぞらと風という自然の一片への投げ返し。何も賢治がこの種の範型的描写を最初に創りだしたとまでいうつもりはない。だが、賢治もまた、健康体

だ。

断章…人称と死

昔、実存主義の大衆版が世間で流行したとき、「結局、人は一人で孤独に死んでいく」云々という言葉が、実存主義的発想の根拠として流れ続けたことがある。だが、いま述べたことを考慮にいれるなら、それはなんと凡庸な言葉に響くだろうか。〈一人称の死〉は、確かに孤独に引き受けなければならないが、古来からの逆説を反復するなら、〈一人称の死〉として恐れられるものは、実は死に至るまでの病苦や激痛であり、死そのものではない。自分の死そのものは実は経験でさええない。経験としてそれに向かっているはずの死は、本人が死ぬ瞬間によくやく充填させられるものであり、まさにその瞬間、本人は存在することをやめるからだ。自分の死は虚焦点のようなものでしかない。

それでも、〈自分がいない世界〉のことを想像し、それに空しさや恐ろしさを感じることはできるだろう、と反論する人もいるかもしれない。だが、〈自分がいない世界〉の想像というが、例えば私たちは百年前には存在していたのか。百年前にいないということの、どこが恐ろしいのか。百年後にもいない。それも似たようなものだ。だが、あえてその恐怖感、あるいは空しさのようなものの根拠を斟酌するなら、こうなるのだろうか。つい先日まで皆と一緒に生きていたのに、もう自分は駄目で、やがていなくなる。自分がいなくなっても、ただそれだけの違いで、他の人たちはそのまま、他の物事もそのまま残っていく。それがなんとも空しいし、その寂寥に恐ろしさを感じる、と。その気持ちは分らないでもない。だが、逆にいうなら、自分がいなくなるとき、自分が知っている人全部、この世界、図書館、美しい谷、珊瑚礁などが、一緒に全部なくなれば

いいと本気で思っている人はいないはずだ。自分が数十年間参加したこの世界——それは、自分と同じくらいにやはり大切なはずだ。私たちは生きている間、たいていの場合、一生懸命なにかに夢中になり、なんとか仕事をしたいと思っている。それはまさに、この世界になにかを残そうとしているからではないのか。その〈痕跡〉を受け入れてくれるこの世界が、自分の死と一緒に消えてしまうのなら、誰も本気で仕事などはしなくなるはずなのだ。自分の生は自分と同時に他者や世界に向けられている。そして自分の死は、自分がなんらかの痕跡をこの世界に残したと思える限りで、生の傍らに退いてしまう。生の痕跡は、実は自分では知らない内にどこかに残っていく。

だから、〈一人称の死〉は、最大の問題ではありえない。では、いままで触れてこなかった〈三人称の死〉は、どうか。実は一言で三人称の死といっても、いろいろ違うタイプのものがある。交番の入り口で見かける〈今日の首都圏での交通事故死亡者数〉にも〈三人称の死〉が見て取れるが、その場合、それはどこで、どんな人が亡くなったのかさえ分からない、文字通り、遠い統計値のような死だ。よほどのことがない限り、それが特定の個人に重要な意味として沈澱することはない。では、〈面識はなくても或る意味で知っている人の死〉は、どうか。それは時空を超える場合がある。私たちはマリリン・モンローがどんな風に死んだかを知っている。デカルトがどんな風に死んだかも知っている。ガンジーがどんな風に死んだかも知っている。それぞれの場合に、彼らが与える死の意味は、微妙に違う音となって私たちの耳に響き渡る。現代人でデカルトと会ったことのある人など誰もいない。だが、それが中等学校で習った「我思う、ゆえに我あり」という言葉を残した合理主義系の哲学者としてしか知らないのならともかく、比較的細かく詳しく調べた後のような場合、彼の人生と彼の死は、どこか二人称に近づいてくるとはいえないだろうか。普段は早起きなど絶対にしない人だったのに、王女に頼まれて北欧に行き、そこで早朝から講義などをやるから、比較的短命で死ななければなら

らなかつた。こんなことが細かく分かつていくと、何百年前の人でも、どこか人柄に触れた現代人のような感じになるとはいえないか。また時代は近いとはいえず、ガンジーに会ったという人もおそろくはいないはずだ。だが、ガンジーがどんな社会活動をし、そのために政治的理由で暗殺されたなどということを知ると、そこに私たちは或る種の高貴な精神のあり方を見て取り、あたかも〈二人称の死〉に触れたように感動することも可能なのだ。確かに、あくまでも二人称に準じるもので、二人称そのものではないだろう。しかし、それは可能なことなのだ。

だから、こういえるのではないか。私たちの人生が或る種の豊かさをもつ度合いは、一人ひとりが生きていく間に、どれだけの〈二人称の死〉に触れることができるのか、その程度に依存するのだ、と。かけがえのない人を一人ひとり失うことで、声にならない慟哭を泣き、体を突き抜ける悲しみに揺さぶられる度合いが多い人、逆説的ながら、その人こそが、豊かな人生を送っている人なのだ。なぜならそれは、〈二人称の死〉が私たちに必ずなにか重要なことを教えてくれるからだけではなく、〈一人称の死〉と呼べるほどに、その当の人と〈二人称の生〉を紡ぎ合う時間を沢山もてたということを意味するからでもある。私たちは（なにも性的な意味だけではなく）〈二人称の生〉に触れるために生き続けている。その意味でいうなら、賢治は濃密な〈二人称の生〉も、〈一人称の死〉もしっかりと知っている人——或る意味で幸せな人だったのである。

罅り殺し

さて、道草もこれくらいにして、また賢治の世界に戻ろう。宮沢賢治における病や死の表象のことを主題にするなら、何も賢治個人の病状や妹とのことだけではなく、いろいろな切り口が可能になる。例えば心血を注

いた農業指導を反映させるようにして、彼には農作物に触れた数多くの詩篇がある。稲熱病いもちなど、〈植物の病氣〉も出てくる。『春と修羅詩稿補遺』の「三月」⁷などは明らかだが、同じ補遺の「まぶしくやつれて」⁸なども、より隠伏的とはいえ、やはり農作物の病気が主題になっている。だが、この小論の以下の部分では賢治の詩そのものからは離れて、大正十年突然上京して国柱会を訪ねたときのやりとりがその爆発的創造の契機になったといわれる、彼の童話世界に目を向けてみよう。童話は晩年に至るまでも継続的に書かれたが、やはり大正十年、つまり賢治二十五歳の頃から農学校を辞める三十歳までの五、六年間が童話作家としては最も活発な時期だった。ちなみに、この時期の賢治は相対的な健康に恵まれた日々でもあった。ただ、「銀河鉄道の夜」のような代表的作品が、文字通り死の直前まで何度も書き直され、最終的には〈決定稿〉が存在しないとさえいえるような状態にあることはいまや有名な事実である。倦むことのない推敲と書き直しの果てに、賢治童話の数多くの作品は、いわば〈水〉のような流動性を獲得していた。仮に〈決定稿〉があるとしても、それは一種の波のようなものに他ならなかったのである。

ところで、彼の童話の中から病や死に少しでも触れているものを網羅的に取り上げるといふ手法は話が表面的になるので避け、興味深い主題に収斂しうるものを数篇だけ、検討することにしよう。しかも病と死の中では特に死を中心に主題化したい。ただそれだけに絞っても、賢治童話でのその現れ方は多様で複雑だということが分かるはずである。

まずは、やや奇怪な小篇から見る。周知のように、かの有名な「注文の多い料理店」¹⁰は、山に紛れ込み腹を空かせた二人の紳士が見知らぬレストランに入り、なにかを食べるつもりが逆に食べられそうになるという逆転の設定から成立していた。この小篇ほど有名ではないかもしれないが、賢治にはもう一つ、視座を完全に逆転させたいささか奇矯な童話がある。解説者の天沢退二郎によれば賢治童話の中でも「屈指の傑作」¹¹と見なす

べきというその作品は「フランドン農学校の豚」¹²というものだ。残念ながら、原稿冒頭の数枚が欠損している。話のアウトラインは明快極まりない。家畜としての豚が、普通に屠殺されていく様を豚の視点から見たものである。原理的な菜食主義者として、動物を食べることを嫌い抜いた賢治にはその名も「ビゼテリアン大祭」¹³という童話があるほどだが、この「フランドン農学校の豚」にはなんの救いもなく、豚が最後に殺されるまでの経過がかなり細かく書かれている。冒頭近くの学生の言葉が興味深い、「豚は」水やスリッパや藁をたべて、それをいちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる。豚のからだはまあたとえば生きた一つの触媒だ。白金と同じことなのだ。¹⁴ そうなのだ、豚のような家畜は一種の肉製造装置であり、それ以上のもではないという酷薄極まりない事実が、この学生の言葉に本質的に凝縮されている。周りの人間たちは、豚をどのように効率よく太らせるか、その技術論に花を咲かせる。幸か不幸か、現実ならそれを豚は理解しない。だが、この童話では豚には人間に匹敵する知性と洞察力がある。「とにかくあいづら二人は、おれにたべものはよこすが、時々まるで北極の、空のやうな眼をして、おれのからだをじつと見る……」¹⁵ というような洞察。北極のような眼で値踏みをする人間。しかも奇態なことに、家畜撲殺同意調印法なる法律が通り、家畜を殺す場合、その当の家畜から屠殺の同意書をとらなければならなくなる。北極のような眼の人間が、家畜の家畜性をなんら滅殺することなく、おもねりながら同意を取るといふ、この上なく残忍な設定だ。北極のような眼に、いつわりの氣遣いがメッキされる。殺すは殺すでも、鬮り殺しにするようなものだ。そして豚から同意を取るために使われる言葉が「この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんのだ」¹⁶ という、それ自体は真としかいいようのない言葉だが、その使用の文脈と意図によって、この真なる言葉に醜い泥がかぶせられる。しかも迫り来る最期に気落ちした豚が体重を落とすと、商品価値をあげるために縛り付けて無理矢理に食わせる。強制肥育である（ちなみに、同意調印法は虚構だが、強制肥育は虚構ではない。例えばフォアグラは鷺鳥や鴨に強制肥育を

して作る食材なのだ)。この重苦しい童話は、途中では終わらない。この〈知性的な豚〉が苦悶の甲斐なく殺されて、体を八つに分解されるまでが一つひとつ丁寧に描かれる。たださすがに賢治は、「あんまり哀れ過ぎるのだ」という言葉を添えて、屠殺の様子は部分的示唆に留めてはいるが。ともあれ、最後の数行は「……その晩空はよく晴れて……つめたく光る弦月が、青じろい水銀のひかりを、こちらの雲にそぎかけ、つめたい白い雪の中、戦場の墓地のやうに積みあげられた雪の底に、豚はきれいに洗はれて、ハきれになつて埋まつた¹⁷」と結ばれている。

家畜の家畜性が剥き出しにされ、感傷を拒絶する金属的な比喩（水銀のひかり）によつて、硬質な雰囲気のままに終わるこの童話の中に、菜食主義者の政治的弾劾だけを見て取ろうとするのは、むしろ困難だ。賢治の手腕は、事態の〈本質的改善〉など端から放棄して、私たち人間が家畜に対して行つてゐることの非情さを際立たせることに発揮されている。家畜に対する扱いを通してそこに現れてくる死は、生物の死でさえない。藁から肉に変貌する行程の一齣。解体されて流れたはずの大量の血はどこかに消え去り、雪や水銀の光という白さの心象の中で、奇妙な殺菌¹⁸をされている。農業や農家との深い関わりがあるからこそ書けたこの一篇の中には、一種の凄みが潜んでいる。確かに傑作といつて構わない作品だと私も思う。

生死の業

家畜ほど酷いとはいえないまでも、他の生物も、私たち人間も、生と死の軛^{くわ}の中で生存の基本条件に捕らわれながら生きてゐるということに変わりはない。生きるためには他の生物を直接殺して食べねばならず、あるいは生活のために生物を殺すことを生業^{なりわい}としなければならない。「洞熊^{ほらくま}学校を卒業した三人¹⁸」という作品が

ある。「蜘蛛となめくぢと狸¹⁹」という作品を発展させたもので、著者にもそれなりに思い入れがある作品だったらしい。ここでは蜘蛛となめくぢと狸のそれぞれが、それぞれの生命形態と生活様式に相応しいやり方で獲物を捕らえ、その獲物に命乞いをされたりしながらも殺して食らうという様子が、童話らしい半透明の現実感を伴って描かれている。そしてそのいずれもが、やがては命を落とすのだ。その先駆形の「蜘蛛となめくぢと狸」では、最後に「地獄行きのマラソン競争²⁰」という言葉が見られ、もともとの主題が因果応報的な仏教的なものだったということが推定できる。発展形の方ではその言葉は消失し、その代わりに三者の死が訪れるそのたびに、蜜を集めたりする蜂の生業が描かれている。蜜を集めるには、別に花を殺さなくてもいい。天沢退二郎はこの変化についての田中瑩一の注釈に触れ、蜂の姿が他の三つの生物の殺しと喰らいの〈生存罪〉との対比として使われているというその見解に触れている。²¹確かに、もし私たちが常に蜜を集める蜂のようにしか、食物と関わらないとするなら、私たちの生存の姿自体がずいぶん変わっていただろう。だが実際には、私たちは豚や牛を殺し、血を流すその生物を切り刻み調理して喰らい尽くす。しかも、それを極めて美味と感じる。それは〈生存罪〉なのだろうか。賢治のような人がおそらく一生を賭けて問いかけたその種の問いに、私がいま気軽な解答をすることは不遜で厚顔なことだ。賢治の問いを、その問いのままに宙づりにしておくことができるだけである。

ところで賢治には「なめとこ山の熊²²」という作品がある。業のような現れをする私たちの生死について扱った、また上記の作品とは違う趣や視点を入れたものだ。高い効能をもつ〈なめとこ山の熊の胆〉をとる名人、淵沢小十郎の物語である。そして、熊の物語でもある。猟師と熊、殺すものと殺されるもの。だから普通なら敵、あるいは少なくとも疎ましい他者関係にすぎないはずだ。だが、そうではないというところがこの小篇の魂になっている。当初から、賢治はこう語る。熊は小十郎のことが好きなのだ、と。ただ、さすがに自分たち

を殺す体制のその瞬間の彼は、「あんまりすきではなかった」²³と。そして小十郎の方も、熊を殺すときでさえ、熊が嫌いなわけではない。小十郎の次のせりふはこの小篇の精髓を表現し尽くしている、「熊。おれはてまへを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへも射たなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまつたし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞするんだ。てめへも熊に生れたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生れなよ」²⁴。

これに似た言葉が、小篇が終わりに近づくと逆方向から発せられる。一月の或る朝、老化と疲労を感じ、珍しく山には入りたくないという言葉を家族に漏らして仕事に行く小十郎は、前から目を付けていたポイントに熊を探しに行く。その見立ては的中したが、思いの外激しい熊の攻撃を受けて倒れるのだ。そのとき彼には遠くからこんな言葉が聞こえてくる、「おゝ小十郎おまへを殺すつもりはなかった」²⁵と。同時に小十郎はちらちら青い星のような光が見えたような気がして、こう思う、「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ」。そして小篇は、中央に死んだ小十郎を抱きながら、回教徒のような姿勢のまま祈り続ける熊たちの姿を描いて終わるのである。最後の小十郎の死の場面は、曖昧に書かれている。熊に襲われて頭が鳴ってまわりが一面真っ青になったとは書かれているが、それは即死ではなく、衝撃からくる昏倒だけなのかもしれない。しかも最後の祈りの場面では「死んで凍えてしまった小十郎」という表現があるが、それは「凍えて死んでしまった小十郎」ということなのかもしれない。昏倒し山の寒さで息絶えたということだ。

いずれにしても、小十郎と熊との関係は、洞熊学校の三匹が喰らい尽くす生物との関係とはずいぶん異質なものであるというのには明らかだ。生きるために殺し、生きるために喰う人間の罪が、可能なかぎり因業なものではないように描出された小十郎と熊。互いが互いを別に嫌いなわけではなく、だからといって、殺すものと殺されるものという関係が解消するわけでもない。小十郎の最後の言葉「熊ども、ゆるせよ」は、全篇の中で全く

違和感なく受け入れられる、むしろ当然に響く言葉だ。殺害などは存在しないユートピアではない。だが、たとえ殺害であっても、「致し方ない」という気持ちと「申し訳ない」という気持ちとが混在し、その上でなされる猟の中で、小十郎の姿は、奪い取る熊の命への精一杯の供養のような風貌を帯びている。小十郎の生と死の有り様の中に、賢治はひよつとすると、それなりに理想的な存在のあり方を示そうとしていたのかもしれない。そしてここでもまた、当人にとつての死そのものが最大の問題ではないということが改めて確認されるはずである。

死はいなくなつた小鳥

小十郎のような人でも、生活のためには熊を殺し続けなければならなかつた。自分が生き延びるためというのでは必ずしもなく、家族を養うために。それでも生はそれ自体の重みと枷をもっている、衣食住の拘束から気ままに逃れることは誰にもできない。飢えも寒さもとても苦しい。生は重い。他方、いままでの私の記述から、私は「死は軽い」と主張するのではないかと思われる読者もいるかもしれないが、そんなことはなく、死も十分に重い。ただ、最も重いわけではない。

ところで、賢治にも、死があたかも軽い通過点のように書かれている小篇がある。「けんじふ虔十公園林」²⁶という作品である。けんじふ虔十は賢治であり、賢治童話での一つの典型的な存在、〈でくのぼう〉である。子どもには馬鹿にされ、大人には放っておかれるでくのぼうだ。そんな彼が或る時珍しく自分の意志で杉を植えたいといい出す。だが周りにはとめられる。なぜならとても育ちそうもない空き地に植えたいといったからだ。しかし父に許されて植え始める。少し育つて並木道のようにになると、そこを子どもたちが通り始め、それをみた虔十は喜んで

「口を大きくあいてはあはあ」²⁷笑う。平二という男に、自分の畑が陰になるから杉を伐れといわれても、普段は人に逆らわない虔十だがそのときだけは逆らって、平二にしたたか殴られる。その後の話の記述が次の部分である、「さて虔十はその秋チブスにかかつて死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやつぱりその病気で死んでゐました。ところがそんなことには一向構はず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました」²⁸。まるで、虔十がその日は朝ご飯を食べませんでした、とでもいうかのような記述である。虔十は主人公ではなかったのか。邪悪さを秘めた平二がその十日前に死んだという設定も、読者の心理からみれば意趣返しといえれば意趣返しだが、それでも虔十が死んでしまったことに変わりはない。

だが、話全体を通してみれば、話の軸は虔十その人にあるというよりは、虔十が植えた林の方にあるというのは明らかだ。彼が死んで二十年もたつて周りの景色が随分変わつても、なぜかその林だけは残つており、虔十を偲んで虔十公園林と名づけて保存していこうというのが、そのあらずじだからである。でくのぼうの虔十はさらつと死んでしまった。だが彼が植えた林はその後もずっと残った。〈生の痕跡〉が見事に残されたのである。

「虔十公園林」の場合、本当は重いはずの生も死も、どこか飄々とした軽さを身につけているようだ。その理由は明らかだ。ここでは生も死も、個人には収斂しないからだ。生は林を楽しげに通る子どもたちだ。はあはあ笑いながらみていた男は、子どもたちにとってはいわば林の木に留まる小鳥のようなもので、或る日その小鳥がどこかに見えなくなつても、子どもたちはあまり気にしない。死は小鳥の不在のようなもの、私の庭からいなくなつても、どこかに飛んでいっただけ。それと同じように虔十はいわばどこかにいっただけなのだ。ここで、虔十が全員をよく知っているわけではない子供たちのために、林をこしらえたと言べるのは、実はあまり正確ではない。虔十は植えたいから植えた。植えた木が運良く生長し、それが綺麗な並木道になつたので子

どもが通った。ただそれだけのことなのだ。

虔十のようになりたいたいというのは定型的すぎるし、気恥ずかしい。ただ、虔十のようなさりげない生死を送りたいと思うと述べるのは、私たちにも許されるのではなからうか。そよ風が過ぎ去るように、生が死へと過ぎ去るような、そんな死を私たちはどこかで望んでいるとはいえないだろうか。小鳥が飛び去り、小枝が揺れる。その一瞬の揺れこそが、〈個人の死〉への道程なのであり、多少苦しくても、それはすぐに終わる。そして後には空遠くに小さく見える鳥の陰と、今まで通りの枝葉が残る。こんな風に考えることができるなら、小十郎のような業に苦しめられる度合いも少しは減るのではなからうか。そして、あの知性的な豚も、少しは成仏への道に近づけるのではなからうか。

〈賢治ワールド〉には、病と死を巡る重要な作品はまだ幾つも存在している。「銀河鉄道の夜」や「グスコ―ブドリの伝記」などの、本当に重要な作品もある。だが、それぞれに独自の世界を抱えたそんな重要作品に、ついでに触れるというわけにはいかない。死はいなくなった小鳥——この言葉を一応の結論として、この小論を終えることにしたい。

[註]

- 1 『文庫版宮沢賢治全集』第二巻、筑摩書房、一九八六年、pp. 503-544.
- 2 立川昭二『病いの文化史』、文藝春秋、二〇〇二年、p. 306.
- 3 『文庫版宮沢賢治全集』第二巻、p. 506.
- 4 立川昭二、前掲書、pp. 312-313.

- 5 彼の妹、とし子への情愛を近親相姦的なものと形容する評言も、たまに目にする。だがその種の評論は、私にはなんの感動も、なんの啓発も与えない。
- 6 『文庫版宮沢賢治全集』第一卷、一九八六年、pp. 156-164.
- 7 『文庫版宮沢賢治全集』第二卷、pp. 380-381.
- 8 同上、pp. 398-399.
- 9 『文庫版宮沢賢治全集』第七卷、pp. 234-298.
- 10 『文庫版宮沢賢治全集』第八卷、筑摩書房、一九八六年、pp. 40-51.
- 11 『文庫版宮沢賢治全集』第七卷、筑摩書房、一九八五年、p. 611.
- 12 同上、pp. 133-153.
- 13 『文庫版宮沢賢治全集』第六卷、筑摩書房、一九八六年、pp. 60-108.
- 14 『文庫版宮沢賢治全集』第七卷、p. 133.
- 15 同上、pp. 135-136.
- 16 同上、p. 140.
- 17 同上、pp. 152-153.
- 18 同上、pp. 70-88.
- 19 『文庫版宮沢賢治全集』第五卷、筑摩書房、一九八六年、pp. 9-25.
- 20 同上、p. 25.
- 21 『文庫版宮沢賢治全集』第七卷、p. 606.
- 22 同上、pp. 58-69.
- 23 同上、p. 60.
- 24 同上、p. 60.
- 25 同上、p. 69.

- 26 『文庫版宮沢賢治全集』第六卷、pp. 403-412.
27 同上、p. 408.
29 同上、p. 409.
28 『文庫版宮沢賢治全集』第八卷、pp. 230-271.